



産経新聞

「バルタスロールの死闘」とは惜しくも2打差で帝王に屈し
いう言葉がある。

主人公は当時37歳の青木功と
40歳のジャック・ニクラウス。も、ずっとテレビの画面に
日本のゴルフ史だけでなく、世づけになり、試合後まさに紳士
界のスポーツ史でも語り継がれ、そのもののニクラウスの謙虚さ

歴史の交差点

明治大特任教授 山内昌之



る名プレーヤーが1980年6月に
繰り広げられた。と、年上の天才への尊敬心にあ
ふれる青木の爽やかさに感動し
たものだった。ニュージャージー州のバルタ
スロール・ゴルフ・クラブで開
かれた全米オープン3日目に両
者は首位に並び、最終日に青木
ルズで行われた同じ全米オープ

ンで松山英樹(25)は、18ホール
を先が上がって後続の組を待っ
ていた。その結果次第ではメジ
ャー初優勝という偉業達成も夢
ではない。結果はブルックス・
ケプカ(27)に4打差をつけられ
て2位に甘んじた。

「バルタスロールの死闘」の時
には、どこか悲壮感を漂わせて
いた日本人ゴルファーも、松山
の代になって自然に名プレーヤー
の多い舞台に溶け込んでい
かのように。実際に松山は今、
世界ランキングと米国賞金ラン

秀才型の天才

しかし松山は、スコア提出所
の前でケプカを出迎えて、優勝
を祝福した。その爽やかさはか
つての青木に通じ、堂々とした
謙虚さはニクラウスを彷彿させ
た。すでに王者の貴祿を漂わせ
ていたのである。

るところだ。今回の松山を見た人のなかに
は、37年前の私と同じように、
ゴルフのルールをあまり知らな
い人もいたに違いない。それで
も多くの人が関心を持ったの
は、松山の持つ資質と敢闘精神
に惹かれる点が多いからではな
いだろうか。

彼は確かに天才ゴルファーと
いってよい。しかし正確に言え
ば、「努力する天才」であり、
「秀才型の天才」ではないだろ
うか。恵まれた体躯とスタミナ
を持つ天性の才能に加えて、精
進を怠らない秀才めいた日々を
堅実に過ごしているあたりに、
ファンの憧憬と人気が高まる理
由もあるのだろう。最終日の14
番ホールでピンそば60センチにつけ
るスピンを効かせたショットは
天才たるゆえんであるし、12番
で5打をバーディーで沈めたの
は普段から努力を重ねる秀才の
成果が出たからと思える。

今この文章を書いている途中
で、8月にノースカロライナ州
で開催される全米プロをフジテ
レビが生中継するという朗報が
飛び込んできた。18日と14日は
地上波で、11日と12日の予選は
BSフジで生放送するというの
だ。また睡眠不足の日が続くだ
ろう。松山と日本人選手の活躍
を改めて期待したい。
(やまうち・まさゆき)